

【展評】

クレメンス・ブロッシュ 天才素描家の芸術と嗜癖

リンツ市立ノルディコ美術館および

オーバーエスタライヒ州立美術館附属リンツ・ギャラリー

リンツ、2016年9月30日—2017年1月15日

福間 加代子

ウィーンから西へ電車でおよそ一時間半、オーストリア第三の都市リンツの中心地で、リンツに生まれ同地に没した画家、クレメンス・ブロッシュ（Klemens Brosch, 1894-1926）の過去最大規模となる回顧展が開かれた。二つの美術館、リンツ市立ノルディコ美術館【図1】およびリンツ・ギャラリーでの同時開催である^{*1}。素描を中心に数多くの作品を残したブロッシュは、20世紀のオーストリアを代表する優れた素描家として、クリムト、シーレおよびココシュカとならびオーストリア国内では高く評されている。薬物依存を苦に32歳でその生涯を閉じるまでに制作した作品は、素描、水彩、油彩を合わせて1000点以上に及ぶ。今回の展示では、両会場合わせておよそ400点が一堂に会した。本来の会期は1月8日までであったが、好評を博したことから両会場とも1月15日まで会期延長となった^{*2}。日本ではいまだ全くと言っていいほど知られていないこの画家の回顧展を、彼の生涯に触れつつ、筆者の印象に残った作品を中心に振り返ってみたい。

二つの美術館での展示は、それぞれ異なった形式のもとに構成されていた。まず比較

^{*1} リンツ・ギャラリーのホームページで、両美術館のキュレーターによる展覧会解説を聴くことができる。<http://www.landesmuseum.at/de/ausstellungen/detail/klemens-brosch.html>（最終閲覧：2017年2月26日）

^{*2} 2017年1月1日時点で、来場者数は五万人を突破した。<http://www.nachrichten.at/nachrichten/kultur/Brosch-Schau-Exklusive-Fuehrung-fuer-OOEN-Leser;art16,2444051>（最終閲覧：2017年2月26日）

的展示スペースの広いリンツ・ギャラリーでは、風景、象徴主義、第一次世界大戦、といった作品のテーマに応じ、会場は六つのセクションに分けられた。一方、リンツ市立ノルディコ美術館では、年代順に構成された七つのセクションに作品が並んだ。

リンツ市立ノルディコ美術館でひととき目を引いた作品は、ブロッシュの初期の代表作《海辺にて》(1913)【図2】および《ガラス戸越しの視線》(1913)【図3】である。《海辺にて》は、1913年の春に彼が仲間と立ち上げた芸術家グループ「リンツ芸術家団体 MAERZ」の最初の展覧会でも展示された作品である。ツバメが海辺を飛び交う様子を描いた作品だが、ここで興味深いのは視点の取り方である。画家の視点が置かれているのは上空であり、眼前を飛び交うツバメ、眼下に望む建築物と木造船、ならびに遙か彼方まで広がる海原が同一画面上に描き出されているのである。画家みずから空を飛びながら描いたかのようなこうした俯瞰的な視点は、ブロッシュの作品にしばしば見受けられる特徴でもある。ここでは計七羽のツバメが細かく描写されると同時に、大海原がその背後に描かれ、極端な近景と遠景が組み合わせられている。とくに初期の作品に見られるこうした構図は、リーグルに倣うなら、近くへの眼差しと遠くへの眼差しの共存と言い換えることもできるだろう。

《ガラス戸越しの視線》(1913)で描かれているのは、一転して室内の様子である。この作品は、インスブルック駐屯地の病院で描かれたとされている。扉にはめ込まれたガラス越しに覗き込んだ病室内には、ひとりの患者が横たわり、頭をを起こしこちらを見つめている。ガラスには、患者を見つめ返す画家ブロッシュ自身の姿が反射して映っており、この反射像のわれわれから見てちょうど右目の部分には、一匹の蠅がとまっている。この一匹の蠅の存在によって、画面奥と手前の空間とがガラスで確かに隔てられていることが強調される。二重の空間表現を支えているのは、画家の繊細な筆致である。

今回の展示作品のなかでもとくにその繊細さが表れていたのは、《ペン画のための習作(手袋習作)》(1918)であった。画面左半分には、あらゆる角度から見た皮手袋が複数描かれ、画面右半分には、その皮手袋を右手につけ腰掛けた女性の姿が描写されている。使い古されたその皮手袋は、それが持ち主の手にいかに馴染んでいるのかが伝わるほど、繊細な線でしわや縫い目の一つ一つまで描き出されている。実物よりも実物らしいとすら思えるそのきめ細やかな描写には、驚かすにはいられない。

画家の細かな描き込みは、戦争画においてもいかに発揮された。1914年に勃発した第一次世界大戦にブロッシュも兄とともに徴兵され、戦地へと送られた。兄は同年11月に戦死、他方ブロッシュは、持病を理由におよそ50日で兵役期間を終えた。その後ブロッシュは戦地での経験をもとに、1916年にかけて戦争画を描いてゆく。同じく第一次世界大戦に従軍したシーレやココシュカとは異なり、ブロッシュの戦争描写は、その腕を

活かした惨たらしく風刺に富んだものとなった*³。リンツ・ギャラリーでは、第一次世界大戦をテーマにしたセクションが設けられ、戦争を扱った作品を多く目にすることができた。

《絞首刑執行人の午睡》(1916)【図 4】で描かれているのは、タイトルにもあるように、死刑執行人たちが昼寝をする場面である。しかしそれは、棒に吊るされた三人の死刑囚の傍らでの出来事である*⁴。絞首刑に処された三人の男たちのうちのひとり、向かって右側の男のほぼ真下では、ひとりの執行人が頭の後ろで手を組み、仰向けで平然と眠りこけている。力なく首を垂れた死刑囚の虚ろな視線は、この執行人へと注がれ、死してなお彼を責め続けているかのようである。《餓死した難民》(1916)でも将校たちの姿が遠回しに非難されている。ぬかるんだ道を走る一台の軍用車と、その脇の用水路で息絶えた難民。将校たちは、難民には見向きもせず、四方に泥水をまき散らし、煙草をふかしながら通り過ぎてゆく。両者の対照的な運命は、陽を受けて走る軍用車と闇に沈む用水路という明暗の差によってもまた暗示されている。いずれの作品においてもプロッシュは、命を奪われた者と奪った者との対比を風刺的に描き出している。

第一次世界大戦は、こうして彼に作品の新たな題材をもたらしたのであるが、この戦争はそれだけでなく、プロッシュのその後の人生を決定づけるあるものと彼を引き合わせる契機ともなった。それとはすなわち、モルヒネである。よく知られているように、第一次世界大戦時にはいまだモルヒネが比較的軽度の痛みに対しても広く用いられていた。幼いころから肺病を患っていたプロッシュは、短期間だったとはいえ、従軍時に医者から鎮痛剤としてモルヒネを投与されていたのである。兵役から戻りウィーン美術アカデミーで学び始めたのちも、中毒症状は消えず、さらにコカインも併用するようになったことで、症状はさらに悪化する一方であった。この嗜癖のために、描きかけの作品すら売りに出す

.....
*³ 残酷な描写にもかかわらず、戦時中にオーストリア＝ハンガリー帝国でプロパガンダの中枢をなしていた報道組織 KPQ (Kriegspressequartier) とプロッシュは契約を結んでいた。詳しくは以下を参照。Nowak-Thaller, Elisabeth, *Klemens Brosch. Kunst und Sucht des Zeichengenies*, Ausst.-kat., Anton Pustet, Salzburg 2016, S.97.

*⁴ 絞首刑に処された三人の男とその傍らにいる兵士という構図やその陰惨な描写は、フランシスコ・デ・ゴヤの《戦争の惨禍》(1810-1820)、なかでも《これもまた》(1812-1815)を彷彿とさせる。プロッシュは学生時代から、ゴヤ、クリンガーおよびベックリンといった画家の作品に慣れ親しんでいた。こうした画家がプロッシュの作品に与えた影響について詳しくは以下を参照。Nowak-Thaller: a.a.O., S.263 ff.

ほど、生活は困窮していった*⁵。薬物の影響は次第に作品へと及び、1920年には「様式の破壊」*⁶が生じた。1910年から1920年までほとんどの作品で用いられていたペンと鉛筆はこれ以降あまり使われなくなり、代わりに筆とインクが好んで用いられるようになる。道具の変化に伴い、初期の作品に見られた細密描写は影を潜め、画家を襲う幻覚や憂いが画面を支配していった。ブロッシュのデスマスクも展示されたリンツ市立ノルディコ美術館では、この時期の作品の展示が充実していた。

筆と黒インクで描かれた《白馬の騎士》*⁷（1922）で表現されているのは、ひとりの騎士が、嵐のように波の打ち寄せる栈橋を疾走する場面である。俯瞰的な視点という初期作品の特徴は踏襲されているものの、初期作品のように近視的なモチーフは描かれず、人間の姿も画面の大きさに比してかなり小さい。同じくモノクロームの作品《大海の怪物》（1920）でも、切り立った崖の下、襲いかかる怪物から逃げ惑う人間は、小さくシルエットのみで描かれている。ややもすれば幻覚に苛まれ、不安感に押し潰されてしまう画家自身の姿であろうか、大自然で孤独にたたずむ人間、もしくは怪物に立ち向かう人間は、この時期頻繁に描かれるモチーフである。赤と緑のカンヴァスから成る二枚の作品《イクチオサウルス、赤と緑》*⁸（1926）のうち赤のカンヴァス【図5】には、十数頭のイクチオサウルスが長い首をくねらせながら闊歩する様子が画面全体に描かれている。画面中央、そのなかの一頭の首には、ひとりの男がしがみ付いている。何をしようというのか、自身の数十倍の大きさを誇るこの太古の生き物を前に、男の存在はあまりにも無力に映る。薬物依存という如何ともしがたい敵に対する画家の現状が投影されているかのようである。

《イクチオサウルス、赤と緑》を描いた同年の12月、クロロホルムを染み込ませたガスマスクを被り、ブロッシュは32歳でその生涯に幕を下ろした。ブロッシュは死の前日と当日に、知人友人それぞれに宛てた遺書を何通か書き残している。そのうちの一通にはこう綴られている。この自殺は「つまるところ、モルヒネという言葉で始まる長い一文に、

.....
*⁵ リンツに住む薬剤師セップ・メリヒャルが、薬物中毒のブロッシュにモルヒネとコカインを与えていた。Nowak-Thaller: a.a.O., S.206. アウグスト・ザンダーの『20世紀の人々』シリーズにも「薬剤師」として収められているメリヒェルは、リンツでは名の知れた人物であり、彼の薬局の裏手にある小部屋には、リンツの芸術家や知識人たちが集った。薬局には使い方によっては毒になる薬もあり、しかもこの薬局が背の低い柵に取り囲まれていたことをもじって、この集会所は、「Giftgardern（Giftはドイツ語では「毒」、gardernは地元の方言では「柵に囲まれた空間」を意味する）」と名付けられた。この「Giftgardern」は、第二次世界大戦中に失われたが、今回、リンツ市立ノルディコ美術館の一階の展示室で再現された。メリヒェルについて詳しくは以下を参照。Nowak-Thaller: a.a.O., S.201 ff.

*⁶ Nowak-Thaller: a.a.O., S.176.

*⁷ テオドル・シュトルムの同名の短編小説が題材となっている。Nowak-Thaller: a.a.O., S.186.

*⁸ タイトルが示すように、これら二枚の作品は画面全体がそれぞれ赤と緑で覆われ、彼の作品にしては珍しく油彩で仕上げられており、全作品中最大の大きさ（ともに134×497cm）を誇る。いずれもリンツ市立ノルディコ美術館によってこの度新たに修復され、初公開された。緑のカンヴァスは未完。

辻棲の合うかたちで打たれたピリオドにすぎないのです」*⁹。モルヒネがもたらした嗜癖に翻弄された天才素描家は、手紙の通り、その長き苦悩にみずから終止符を打った。

今回の展覧会が始まった 2016 年は、画家が没してからちょうど 90 年という節目に当たる年である*¹⁰。州立と市立の美術館が共同で企画したこの大規模な回顧展は、開催以前からメディアでも取り上げられ、注目を集めていた。何よりも来場者たちの関心を引いたのは、その開催規模により浮き彫りとなった、時代に人生を大きく左右されたひとりの画家の顛末であろう。才能ある若き素描家の人生は、戦争を機に暗転した。ブロッシュの分岐点となった第一次世界大戦の終戦から奇しくも 100 年が経とうとしているいま、この画家の類まれなる技巧は、それが若くして失われたという事実によって、よりいっそう強くわたしたちの脳裏に焼き付けられるのである。クレメンス・ブロッシュをリンツのご当地画家で終わらせるのはあまりに惜しい。近い未来、日本でもブロッシュの展覧会が開かれることを期待してやまない。

図版



図 1. リンツ市立ノルディコ美術館外観、筆者撮影

*⁹ Nowak-Thaller: a.a.O., S.251.

*¹⁰ リンツで最後にブロッシュ単独の展覧会が開かれたのは、およそ 25 年前のことである。リンツの地域コミュニティ放送 Radio FRO（2016 年 9 月 15 日付）で、今回の展覧会にかけるキュレーターの思いを窺い知ることができる。 <https://cba.fro.at/ondemand?id=323946>（最終閲覧：2017 年 2 月 26 日）



図 2. クレメンス・ブロッシュ 《海辺にて》(1913)、ペンとインク、
34,5 × 41cm、オーバーエスタライヒ州立美術館

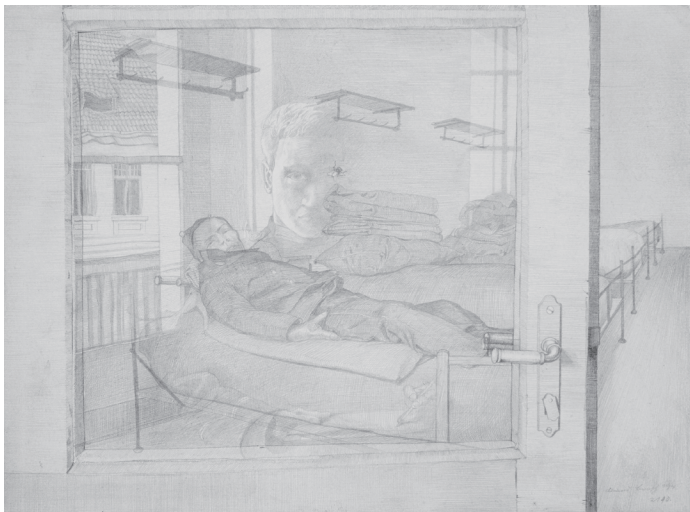


図 3. クレメンス・ブロッシュ 《ガラス戸越しの視線》(1913)、鉛筆、
25 × 34cm、リンツ市立ノルディコ美術館



図 4. クレメンス・ブロッシュ《絞首刑執行人の午睡》(1916)、ペンとインク、39 × 52cm、リンツ市立ノルディコ美術館



図 5. クレメンス・ブロッシュ《イクチオサウルス、赤》(1926)、カンヴァスに油彩、134 × 497cm、リンツ市立ノルディコ美術館

